

「自分の敵を愛せよ」

サムエル上24：1-7

ルカ6：27-39

(1)

主イエスが弟子たちに教えた多くの御言の中で、これほど有名な箇所はないと思われる。しかし、また、何と受け止めがたい御言でありましょうか。

「自分の敵を許せ」であれば、まだ理解できます。しかし、「自分の敵を愛せよ」なのです。わたしに憎しみをいだき、危害を加えてくる者を「愛せよ」との求めは、あまりに理不尽であり、現実離れしている教えではないか、いえ、過度に理想を求めている教え、なかには、社会的に弱い立場にある者には必要とされている教えとも受け取られてきました。

しかし、こうしたさまざま疑問や反論にもかかわらず、「自分の敵を愛せよ」は、主イエスの時代から2000年経た今日において、少しも色あせておりません。

いえ、むしろ、21世紀の今日、ますます、真剣に聞き取るべき真理の御言としての輝きを放っています。アメリカやドイツの政治家たちが、真剣に「自分の敵を愛せよ」この御言に耳を傾ける必要に迫られています。中国と近隣諸国との対立、イランとイスラエルとの対立、シリアの内紛はますます激化しています。憎しみの連鎖は果てなく続くかのようです。多くの人心とは、一歩間違えば核戦

争に向かう危うい道を歩み始めている、と感じ始めております。それを対岸の火事のように眺めていてはなりません。

「自分の敵を愛せよ」とは、ほかでもありません、わたしの足元にも向けられている御言であります。主イエスは、平和主義を唱えただけではありません。「自分の敵を愛せよ」とお語りになりながら、主イエスの身辺は絶えず危険が迫っていました。それで身を避けたかといえば、むしろ、正面から向かい合いました。

「自分の敵を愛せよ」の聖句を額縁にしている人はいないかもしれません。しかし、胸に手をあててみれば、誰にでも「敵」とみなし得る者がいるはずですよ。いえ、いませんと反論されたとしても、それは、漠然とそう思っているに過ぎません。この世に生きている限り、何らかの対立は避けられません。

昔から、「男には家から出れば、七人の敵がいる」と言われてきました。男が玄関の敷居をまたぎ、一歩家から外に出れば、そこには、ライバルと言えるものが7人はいる、しかも、男だけではなく、女性も同じです。多くの人は人間関係に神経をとがらせています。

芸能界というところは、特に「ゲン」を拒みます。外出する時、玄関先で、火打ち石でカチカチと切り火をする習慣が今でもあるといわれています。芸能界は、先輩・後輩のけじめが厳しく、挨拶一つ間違えると、この世界では生き残れないといわれています。「だが挨拶、



ない、また愛以外に方法はない、という事です。

「仮想敵国」という言葉があります。アメリカの大統領ブッシュさんは、大量兵器が隠されていると言いつつ、あの湾岸戦争を始めました。実際はありませんでした。相手に対する必要以上の畏れがその原因でありました。「敵」とみている相手は、本当に「敵」なのか？それとも、もしかしたら、幻想であるかもしれません。いえ、敵と思い込んでいる相手は、もともと敵でもなんでもなく、自分の味方となりえる相手であるかもしれません。これが人生の妙というものではないでしょうか。

「自分の敵」を滅ぼすために、主イエスは方ババリの十字架にかけられたではありません。ペソ2:16（ために主イエスは十字架に架かられたのであります。相手に対する自分の「敵意」が問題なのであります。敵意を抱くことは、強ひけることはいえませぬ。むしろ、弱ひることにはなごうか。

その証拠に、三歳児がなぐりかかっている時、大人はニコニコと笑って受け止めます。三歳の子でも「敵意」を持つほど、わたしたちは弱くありません。と、は、は、は、敵意を抱く自分の側の問題があらわれます。第二章の節、シベリヤの十人衆の物語、自分の心を治める者は城を攻め取る者になります。

それにしても、「自分の敵を愛せよ」との究極の理由を主イエスはこう言われています。

「そして、あなたがたの受ける報いはすばらしく、あなたがたは、いと高き方の子どもになれます」(6:25)。

「アバ・父よ」と呼んでもよい者としてくださった、天の父がわれみ深いお方であるとするれば、子とされたわたしたちもまた、憐れみ深いものとならなさい、との勧めであります。

(3) 「自分の敵を愛せよ」、この御言を身をもって実践したキリスト者がいました。

・沖縄の北部に伊江島があります。そこに、阿波根 昌鴻（あはじんしょうこう）記念館があります。

戦後、伊江島の土地の約六割が、米軍に強制接収されたとき、先頭に立ち、ムシロをあげて、「食糧行進」を行い、土地強奪の不当性を訴えました。ところが、この島は、アメリカ軍が血を流して日本軍から取り戻したものである。おまえたちにはなんの権利もない。イエスもノーモナリ」という返答でした。

こうして、家は焼き払われ、フルドーサーで整地され、島の6割以上が基地となりました。しかし、伊江島の農民たちは、最後まで、非暴力による抵抗を続けた。1972年まで、島の半分を占めていたと聞いていたのが、その「ニコクな闘いの先頭に立ったのが、キリスト者の阿波根 昌鴻さんでした。

「アメリカ人を敵と見なしははいけない。

怒ったり、悪い言葉を出してはいけない。米軍に心対するとき、モッ、カマ、棒切れなどを手にしてはいけない。耳の上に手をあけてはならない。大きな声を出さない。静かに話す。道理を尽くして訴える。アメリカ力の兵隊を恐れない。生産者である農民は、はるかに軍人にまさっているとの自覚を忘れてはならない。むしろ、破壊者である軍人を教え導く心構えこそが大切とされる」。

ただ、抗う（あらがう）だけではなく、敵とみなす相手の背後には、常に「祈り」がありました。

・韓国に、「孫良源牧師」がいます。すでに、25年も前になりましたが、釜山から車で2時間ほどの「麗水」という海沿いの美しい街に案内されました。

孫牧師は、ハンセン病園の患者たちへの福音宣教に、その生涯をささげた方です。

朝鮮動乱の2年前、麗水付近で虐殺事件が起き、反乱軍と共産主義者の学生たち、約八〇〇〇人が虐殺されました。孫良源牧師の二人の子供が事件に巻き込まれて銃で撃ち殺されました。孫良源牧師夫妻は子供たちの死を知り、深い悲しみと苦悩に打ちひしがれます。ところが、葬儀を終えるとすくなく、孫牧師は処刑と決まっていた共産軍の青年の特赦を願います。最初はダメでしたが、不忠議なことで、特赦を得て青年は処刑を免れます。

その彼を、何と、孫牧師は自分の養子として

迎え入れたのです。さらに、彼は孫牧師夫妻と同じ屋根の下で寝起きを共にします。やがて、彼はキリスト教に回心し、信仰を持つまでになります。孫牧師は申します。「キリストは、ただ、人を赦すことだけを求めたものではありません。敵をも愛することを求めたのです。それで、わたしはそのようにしたまでです」。孫牧師の生涯は、タイトル「愛の原子爆弾」という「デオ」にまでなりました。麗水の墓地には、「死に至るまで忠実であれ。そうすれば、あなたに命の冠を授けよう」(黙示録2:10)の御言が刻まれておりました。

・さらに、もう一人、米国の公民権運動の先頭に立った「ルーサー・キング牧師」がおります。「わたしは夢見る (I have a dream)」という有名な説教を残しています。

「私は夢見る。ある日、この国が目覚め、私たちは全て平等に創造されていることを。

私は夢見る。ある日、元奴隷の息子と元奴隷所有者の息子が、兄弟愛に満ちたテーブルにともに座ることが出来る夢を。

私は夢見る。ある日、自由と公正のオアシスに変わってゆく夢を。

私は夢見る。ある日、私の四人の子供たちが皮膚の色によって評価されず、その人格の内容によって評価される国に住んでいる夢を私は夢見る今、この時こー」

暴力に対しては非暴力を、憎悪に対しては愛をもって応え、人種差別政策の強固な扉を開いたのがキング牧師ですが、銃弾に撃たれて

即死しました。

何事であれ、ただ、手をこまねいているだけではことは進みません。先ず、祈らなければ、そつです、祈りなしに、どうしてたった一人の人でも愛することができるとしようか。

「愛は神から出たものなのです。すべて愛するひとは、神から生まれた者で、神を知っているのです」(①ヨハネ4:7)——、となれば、愛の源なる神から、敵とみなす者を愛しうる力をいただいて、ひざまずいて祈らねばなりません。戦うべきはわたしのうちにある『敵意』です。

「祈りに於いて、わたしたちは、敵のかたわらに歩みよることができます。わたしたちは、とりなしの祈りにより、敵の方に一歩を踏み出すなら、敵もわたしを傷つけることはありません。そこでわたしは、相手の困難、行き詰り、貧しさを知り、神の代理人になりうるのです」とはキング牧師の申したことです。

天におられる父は、すべての人を祝福し祈ることを求めておられます。

たごえ、敵に対して、愛や親切が少しも効力を発揮しない時でも、相手を祝福して祈ることはできます。そわが相手とわたしの間にキリストの十字架を立てることはないのであります。

#### 【共に祈るまごひ】

天の父よ、わたしには敵を愛することなどできません。「キリストはわたしたちの平和であり、

ての中垣を取り除き、ひとりの新しい人に造りかえて二つのものに平和をきたらせ、十字架によつて、二つのものを一つのからだとして神と和解させ、敵意を十字架にかけて滅ぼしてくださった」といふことを信仰にゆき受け止めることができる力をお与えください。イエス・キリストの名によつて祈ります。」アメン